

悪魔の城

豊田有恒



あくましろ
悪魔の城

とよたありつね
豊田有恒

© Aritsune Toyota 1986



講談社文庫
定価360円

昭和61年10月15日第1刷発行

発行者——野間惟道

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——有限会社中澤製本所

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。(庫一)

ISBN4-06-183835-0 (0)



講談社文庫

悪魔の城

豊田有恒

講談社

目次

悪魔の城	7	タイムマシン	124
男憑 つ き	12	闘争	137
純血	24	免許	149
恐妻 タイ、ワイ	37	麻雀師範	170
複製	49	崇 た り	182
愛人	61	飢餓訓練	202
テレパシ	74	暴走	215
夢	87	起源	229
オレ	99	評論家	241
UFO	112	制裁	254
		あとがき	265

本文イラスト 藤井裕二

悪魔の城

悪魔の城

うしろから、巨大な竜が追ってきた。まっかな口から、恐ろしい炎をふきだしている。私は、夢中になって、走りつづけた。あの竜は、人食い竜なのだという。もし追いつかれたら、炎で丸焼きにされ、食われてしまうだろう。

心臓がたかなり、息がきれてきた。すると、うしろの竜も、きゆうに遅くなった。さしもの怪物も、疲れはじめたにちがいない。

私の足どりは、さっきよりも、ずっと弱っているが、それ以上に、竜のほうも、へたばっているのだろう。まもなく、私は、竜を引きはなした。まだ油断はできないが、これだけ、はなれば、ひと安心だろう。私は、走るのをやめて、呼吸をととのえながら、歩きはじめた。追いつかれそうになったら、また走りだせばすむだろう。

行手に、湖が見えてきた。岸にちかいところに、命の泉がある。私は、泉のところで、泉の水を飲んだ。すくなくとも、五分間やすんでからでないと、命の水の効き目は、あらわれない。火

をはく竜は、水を恐れるというから、湖へ近よってこない。

私は、体力が回復したので、湖へとびこんだ。はじめは、ゆっくり泳いでいたが、ふと近くを見て、びっくりした。大変だ。とんでもないものがある。三角のナイフみたいな牙の生えた、見たこともない魚だ。怪魚は、湖面におどりあがった。三メートルもある巨大な魚だ。

私は、両手で水をかいて、必死になって泳ぎつづけた。

早く対岸へ泳ぎつかなければならぬ。さもないと、せつかく、ここまで来たのに、怪魚に食われてしまう。

私は、こんなところで、死ぬわけにはいかない。対岸の悪魔の城にとらわれているお姫さまを、助けださなければならぬのだ。

むこう岸へ這いあがるなり、私は、ばったり倒れこんでしまった。すると、そこへ、妖精がやってきた。

「命の水をのんで、十二分やすんでから、いくのです」

私は妖精に言われたとおりにした。立ちあがると、氣力がみなぎってきた。

見上げると、悪魔の城が、そびえたっている。切りたった壁のような岩山の上に、不気味な塔が立っているのだ。

私は、気付かれないように、岩山の裏手へまわった。けわしい山道だが、こっちからなら、城へ近づける。ただし、悪魔のほうも、森のなかに、さまざまな怪物をはなっている。城へしのびこもうとして、生きて帰ったものはいないという。



とつぜん、林のなかから、猿人がとびだしてきて、私につかみかかった。ゴリラみたいな大きなやつだ。

私は、しばらく、猿人ともみあっていた。やつのほうが、はるかに力がつよい。大きな体が、のしかかってくる。私は、さがりながら体を入れかえて、やつの右腕をつかんだ。とびかかってくる勢いを利用して、私は、やつを右腕をひきよせて、力まかせに投げつけた。猿人は、投げとばされて、だらしなく、しりもちをついている。

私は、かけだした。林のなかには、不気味な鳥の声がかきこえる。蔓草で編んだ吊橋がかかっている。谷底から吹きあがる風が、ヒューヒューなり、吊橋は大きく揺れる。私は、とうとう、城の裏手にたどりついた。秘密の扉をひらいて、城のなかへ入りこむ。荒けずりの岩壁にかこまれた通路を、なんども曲がったり、登ったりしていると、ようやく、塔の上にでた。

そこには、悪魔がいて、お姫さまが、しばらくつけられている。私は、台の上にある水晶のマリを手にとった。このマリには、悪魔の魂が封じこめてある。悪魔の手下たちが、わっと、おそいかかってくる。私は、水晶のマリをつきながら、行手をうかがった。むこうの壁に、聖なる籠かごが下げてある。私は、さらに進んだ。

手下たちは、行かせまいとして、行手に立ちふさがる。私は、水晶のマリをつきながら、手下たちをかわし、悪魔のほうへと突進した。

私は、立ちどまり、マリをとって投げた。マリは、聖なる籠にとびこんだ。

「ギャーッ」

悪魔は、悲鳴をあげて倒れ、そして死んだ。

私は、お姫さまをときはなち、しっかりと抱きしめた。

「今日は、当社のロール・プレイング・アスレチックを、ご利用くださいまして、ありがとうございます。当施設は、日頃、運動不足の皆さまに、コンピュータ催眠により、運動を楽しんでいただくことを、モットーとしております。お客様が、ご希望になられたマラソン・水泳・柔道・バスケットなどのほかに、さまざまなプログラムが、用意してございます。また、ご利用ください」

男憑つきき

目をさますと、なんとなく、ふとんが女臭かった。おれは、焦点の定まらない眼で、あたりを見まわした。まっさきに目についたのは、すぐ脇にある白いものだった。それは、白塗りの鏡台だった。おれは、枕もとを見まわしてから体を起こそうとした。そして、アパートのせんべいぶとんではなく、ベッドに寝ていることに気づいた。

おれは、妙な気分だった。起きあがろうとしても、体の中心に力が入らなかった。おれは、ポコチンのあたりに手をふれて、ぎゃつといってとびおきた。

ない！ 毎朝きまって、元氣よく挨拶してくれるはずの、おれのポコチンが、なくなつてしまったのだ。おれは、ベッドからとびおきて、ポコチンがあるはずのところへ、ふたたび手を触れてみた。なんだか嫌な感触で、人さし指の第一関節まで、ぐちよつとめりこんだ。

おれは、呆然と立ちすくんだ。よく見ると、おれは変なものを着ていた。半月も洗濯してないいつものパジャマではなく、ナイロンみたいな薄い布地の、ピンクのガウンみたいなものを身

につけていた。

そこは、おれの知らない、豪華なアパートのなかだった。だが、おれは、ここがどこか考えるより先に、なぜポコチンがなくなったかについて、優先的に考えはじめた。

ガウンを脱ぎすてようとして、胸のボタンに手をかけると、弾力のある抵抗につきあつた。あわてふためいて、ガウンを脱ぎすてると、目の前に、ブルンと二つの丸いものが現われた。ウルトラ級の超ボインのオッパイで、桜色をしたてっぺんがすこし埋もれ、笑窪^{えくぼ}みたいな皺^{しわ}が寄っていた。おれは、かっと頭に血がのぼりかけた。ふつうなら、おれのポコチンが、なんらかの反応を示すはずであるが、大事な分身は、今は見当らなくなっていた。

寝ぼけた頭の中身を整理すると、そのオッパイは、どうやら、おれの体に生えているものらしいことが、判りはじめてきた。

おれは、ベッドをおどりこえて、むこうにある大きな鏡のまえに、すつとんでいった。

おれは、鏡のなかに映っている、すばらしい美人を見つめ、ごくりと生唾を呑みこんだ。なにしろ、ふるいつきたくなるような可愛子ちゃんが、ピンクのネグリジェの胸をはだけ、こっちを見ているのだから、男なら誰だって欲情する。

おれは、あることに気づいた。おれが片手をもちあげると、鏡のなかの可愛子ちゃんも片手を上げる。おれが、べろをだすと、なまめかしい口許から、可愛い舌がチョロツと顔をだす。

おれは、とんでもないことに気づいた。鏡のなかには、おれ自身が映っているはずである。とすると、あの可愛子ちゃんが、おれということになる。おれは、ためしに、おれ自身のオッパイ

の先をつまんでみた。すると、鏡のなかでも、しなやかな手がオッパイをつまんでいる。

ようやく目が醒めてくると、おれは、なにが起こったか、気づきはじめた。おれは、この可愛い女の子に変身してしまったのである。そうとしか思えないのである。

おれは、ベッドにどっかりと腰かけ、右足を左の股に乗せ、腕組みをして考えこんだ。いったい、なぜ、こんなことになったか、さっぱり覚えていない。ゆうべは、おなじ柔道部の仲間たちと呑みあるいて、いつのまにか意識を失ってしまい、気がついたら、ここにいたというわけである。酔っぱらって、虎になる話ならよくきくが、女になったなどという話は、読んだことも聞いたこともない。

おれは、ふと、鏡のなかを見つめた。可愛子ちゃんが、片脚を組んだあられもない恰好で、ベッドに坐りこんでいる。見ていると、だんだん興奮してくるので、おもわず目をそらそうとして、あることに気づいた。どこかで、この女の子を見たことがある。混血らしく、彫りのふかい顔をしている。はじめのうち、化粧気のない寝起きの顔なので、よく思いだせなかったが、見つめているうちに思いだしてきた。

北条ニーナ。歌にドラマに、大活躍している人気タレントである。いったい、なぜ、おれが、北条ニーナに、変身してしまったのだろうか？ おれには、さっぱり判らないが、だんだん妙な気になってきた。おれは、これまで、誰も見たことのない北条ニーナのヌードを、鼻の先に眺めているわけである。おれは、自分の胸を指先でつついてみた。おれは、北条ニーナのオッパイにさわったわけである。それから、元ポコチンがあつたはずの場所に、手を触れてみた。おれは、北

条ニーナのアソコにさわったのである。

おれは、すっかり興奮してきた。催情^{さいじょう}してきた。欲望^{さく}してきた。いつもなら、ここで、オナニーでもするところだが、股間に目をやったとたん、きゆうにシラけた。オナニーしたくても、肝心のポコチンが、なくなってしまったのである。

しばらく、ベッドに腰かけていたが、はだけたままのネグリジェの胸が、気になって仕方がない。北条ニーナの肉体がそこにあるのだから、目障りでしょうがない。もし、ここにおれがいれば、北条ニーナに、襲いかかるところだが、おれ自身が、北条ニーナになっているのだから、どうすることもできない。

これは、拷問と同じことである。

そうだ、北条ニーナの肉体を、なにかで包んでしまえば、刺激が減ってくる。おれは、ネグリジェをかなぐりすてて、パンティを引きずりおろし、衣裳ダンスをひきあげた。そのとたんに、目のまえに、北条ニーナの強烈なヌードがあったので、目がくらくらした。衣裳ダンスのドアの裏に鏡がはってあったのである。女の部屋には、あちこちに鏡が仕かけてあるらしい。

おれは、衣裳ダンスのなかをひつかきまわして、着るものをさがした。長いドレスやら、パンタロンやら、ミニスカートやら、いろいろなものが入っている。女臭いので閉口しながら、なにを着るべきか考えた。女の着るものというのは、構造がちがすぎるから、どれとどれを着たらいいか判らないから、やめにしておいた。

結局、シャツみたいな下着とパンティを身につけ、そのうえにTシャツとGパンを着ることに